

## 太平洋のトラウマ：靖国神社による戦争語りのフェティシズム

ジョン・ブリン(John Breen)

ロンドン大学 SOAS 校

(訳：東健太郎)

### 序説

「山田さんは、その、まあ、下士官の中では尊敬してましたですね、あのう、橋本義一さんですね、三人で草の葉をひいてですね、くじ引きして、それで、殺されたということ聞きましてですね、(中略) 実際は銃殺しとりながらね、それを戦病死なんか言ってますとね」<sup>1</sup>。元独立工兵隊第 36 連隊の伍長奥崎謙三が、終戦から 40 年後、かつて下士官だった山田軍曹と対面して憤っている時の言葉である。原一男監督の風変わりなドキュメンタリー「ゆきゆきて神軍」(1987) の第 9 幕は、この 2 人の対面を軸に展開する。この映画は、1945 年のニューギニアで起きた戦友の殺害に関わった士官や下士官たちを奥崎が次々と追い詰めて行く姿を追ったものである。

第 9 幕では、興味を惹かれる口論が 2 人の間で繰り広げられる。

山田「語ればね、かえって害になる場合もうんとあるわけ。だから俺の記録よんでみてもわかるだんべね、どういう風に生きてきたか、木のうーん、草の根っこ、木の根っこから木のとっぺんまで食べたって書いてある。この中にいっさいが含まれているわけだよ」

奥崎「それぐらいの話はね、戦争から帰って来た人は皆言ってるわけ。(中略) そういうありふれたことをね、今日聞きにきてるんじゃないんです、あなたに、ね」

山田「俺にはこれ以上のことは言えないことを心に決めたわけ、(中略) 結局これはね、そのときの人の指導者だとか、あー、そいつの流れに流されただけだよ」

奥崎「そうでしょう、だから心配する、するならばね、なぜあなたの体験したことをね、その語るべきじゃないか。そういう連中にまた再びそういうことをさせないためにあなたは地獄を見てきたわけでしょ！ その地獄を語らなくてね、戦友の慰霊なんかははずがないですよ。あなたは結局ね、現在のね、現在の家族とかね女房だとか子供だとか孫のこと考えて言わないんでしょう、あなたは。だからこちらへね、橋本義一さんのお兄さんが、話を聞きたいとお見えになっているわけでしょ。そしたらあなたはね、何かを語るべきでしょ、何か、すいませんとか何か言わないんですか、あなた」

山田「なんで俺にすいませんで、言えってんだ」

奥崎「なんで、あなたは三人で殺したんじゃないか」

山田「知るかい、そんなことは」

奥崎「事実を話して下さいっていうんだ、それが最高の供養になるっていうんだ」

山田「俺は俺なりの供養してる、奥崎さんは奥崎さんの供養なりの供養してるだろう。俺は俺なりの供養してるんだよ、だから俺は靖国神社行っただけ」

奥崎(怒りで青ざめて)「靖国神社行ったら英霊が、その、救われると思うのか、貴様、えっ」

---

<sup>1</sup> 以下、「ゆきゆきて、神軍」の台詞の引用は、原一男・疾走プロダクション『ドキュメント ゆきゆきて、神軍』(社会思想社、1994) に拠った(訳注)。

山田の妻(奥崎が山田を押し倒して喉を絞めたため)「奥崎さん、病気だからすみません、それだけはやめて、ここで死んだら倅が」

奥崎は衝動に駆られている。彼を駆り立てるのは、独立工兵隊第 36 連隊の下士官や士官たちが、橋本やその他の戦友を殺害したというだけでなく、その人肉を食べるために殺害したのだという確信である。奥崎に飛び掛かれ、山田軍曹は最後には全てを告白した。彼が言うには、上官は確かに橋本のような人々を殺害するよう命じた。それらの人々らが嫌われていたり、他の者のお荷物になるという理由で。そして彼らを殺害すると、肉片を切り取り、調理して食ったのである。奥崎と山田、記憶を呼び起こす力はそれぞれで大きく違っていたが、奥崎が山田に飛び掛かるという行為を経て、やがて 1945 年のニューギニアという地獄の共通の記憶に一致して行った。「ゆきゆきて神軍」第 9 幕は、奥崎が山田を慰め、山田の病気について心から気遣うところで終わっている。

奥崎が強調していたように、ニューギニアは間違いなく地獄そのものであった。大本営はろくに訓練もしていない 16 万の人間を東ニューギニアに送り込んだが、そのうち僅か 6 パーセントしか生還しなかった。数万人が餓死した。ニューギニア戦の立案及び実施に対する戦後の一般的な評価は、無能かつ過失に満ちていたというものである。帝国海軍はニューギニアの海岸線については知識を有していたが、島の内部の社会や経済の状態については全く無知だった。例えば、ニューギニアの原住民は狩猟採集民で、穀物を生産するような畑はなく、補給線が断たれた時に兵士たちを養うことはできない、といったことを全く知らなかったのである。しかし、補給線が断たれるであろうこと、そしてニューギニアから日本までの距離や、アメリカ軍が太平洋で増大させている支配権からして、補給線を回復する可能性が殆どないことは承知していた。帝国陸軍は、兵士がニューギニアに上陸して戦う計画だったにもかかわらず、その地域の地図さえ持っていなかった。それでも、司令部もそう考えたように、アメリカ軍とオーストラリア軍の北進を防ぐため、日本はニューギニアを占領する必要があった。マッカーサー将軍は真珠湾攻撃の後にブリスベーンに逃れており、北部オーストラリアから連合国の反攻を指揮していたのである。

防衛大学の田中宏巳は、ニューギニア戦を深く研究している数少ない人物の 1 人だが、彼の評価も必ずしも肯定的なものではない。彼によれば、この作戦は近くのガダルカナルで日本が被った壊滅的な敗北を隠すための煙幕であった。司令部は十分な軍隊をガダルカナルに送ることに失敗し、何度かの局面で送り込んだ数少ない部隊も壊滅した。総計で 2 万名の日本兵が戦死し、1000 人の捕虜を出したのである。帝国陸軍にとってニューギニアは、ガダルカナルのような敗北と屈辱ではなく「前進」と「攻勢」を国家に対して示すことができる筈の場であった<sup>2</sup>。田中の論文によれば、大本営はおよそ万単位の間をニューギニアに見捨てた。彼らの運命は極めて悲惨なものだった。彼らは速やかに包囲され、取り得る選択肢は殆どなかった。多くの者は海岸部に自殺攻撃を仕掛けた。あるいは山岳部の密林に逃れても、そこで餓えて死ぬか、殺して食うかということになった。オーストラリアの公文書からは、後者の選択が珍しいものではなかったこと、そして自暴自棄になった日本兵が、自分たち同士だけでなく、捕虜としたオーストラリア兵やニューギニアの原住民を殺害して食っていたことが確認出来る<sup>3</sup>。

<sup>2</sup> Tanaka, 'The Pacific war and New Guinea' を参照。

<sup>3</sup> この点については Tanaka. *Hidden horrors*, pp. 111-34. を参照。

ニューギニア戦、というよりも全ての戦線における戦闘は、靖国——この小論の主要な焦点である——にどのように記憶されているのだろうか、という疑問が当然頭をもたげてくる。何と云っても靖国は追悼の場である以上——靖国は自らのことを「国家的な」追悼の場と主張しているが——記憶の場でもあるのだ。追悼という行為は記憶の行為なしには不可能である。拙稿の目的は、靖国が自在に展開しているいくつかの記憶の手法のうち、展示と儀礼という2つの点について検討すること、そうした手法がニューギニア戦の事例でどのように働いているかを吟味すること、そして、何故 靖国が記憶の領域においてそのようなことを行っているのかを問うことである<sup>4</sup>。

## 展示

記憶を巡る靖国の第一の手法は展示であり、靖国の境内で拜殿に隣接した位置にある戦争博物館の遊就館は、この点で特に目立っている。「特に」と言うのは、展示は博物館に限られないためである。例えば、神社の敷地には数多くの兵器が展示されている。戦艦大和の船体の模型から、最近海中から引き揚げられた戦艦陸奥の巨大な大砲までである<sup>5</sup>。また、参道の途中にそびえ立つ大燈籠は、戦闘の光景を描いた浮き彫りで飾られている。とは言え、「近代史の真実を明らかにする」ことを使命にうたう遊就館こそがやはり中心的な展示の場となる。建物の内部には、ニューギニアを含め、太平洋戦争の全ての戦線についてのパネルが展示されている。

さて、遊就館のニューギニアに関するパネルに、奥崎や山田、橋本らが生きたニューギニアの話は、ほとんど期待できないが、それだけに、実際の遊就館のやり方を見てみるのは興味深い。ニューギニアのパネルには、山本五十六連合艦隊司令長官の写真が展示されている。山本が地図に目をやって作戦の計画を立てている姿の写真だが、この作戦に計画など存在していなかった（ついであるが、山本はミッドウェー海戦の大損害の責任を負っている）。陳列棚に展示されている彼の双眼鏡もまたある種の洞察力を示唆しているのであろうが、そうしたものはニューギニア戦では完全に欠けていた。山本が搭乗していた飛行機の破片もある。飛行機は1943年にニューギニアの密林に墜落し、山本はニューギニアの地獄が現実になる前に死んだのだ。安田海軍大佐の帽子と、安田が部下を率いて自殺攻撃を行う前に山本に宛てた電報も並べられ、解説文も添えられているが、そこで述べられている「人間性」なるものについては深く考えさせられる。「この間に発揮された崇高な人間性は、ブナの玉砕、ダンピールの悲劇、そしてサラワケット山系の縦断などに多くの逸話を残した」。

いくつかのポイントが見出される。

上級司令官の無能、大量の餓死や病気、あるいは人肉食についての言及がない。これは驚くようなことではないが、それが計画や洞察力、あるいは忍耐や勇敢さに置き換えられているのである。

勇敢な物語——安田大佐のような人間によって示された並外れた勇気を疑うべくもない——は全て士官と下士官についてのものである。一般兵士に関するものはない。

この展示について、というよりも遊就館の全ての展示について、不思議なことがもう1つある。山本や安田や他の者たちが戦った敵の肖像どころか言及もどこにもないのである。敵を不在にすることで、ニューギニ

<sup>4</sup> 筆者は異なる角度からではあるが、靖国の儀礼と展示の戦略について、Breen, 'Yasukuni and the loss of historical memory' で既に論じている。更に今回筆者は、記憶形成における神社のテキストの利用について考察する。

<sup>5</sup> 大和の模型、及び陸奥の副砲は、現在では遊就館の館内に移されている（訳注）。

アのパネルは、犯された愚行はおろか、敗北を思い出す可能性も隠蔽している。

山田軍曹のような人間にとって、少なくとも奥崎に会うまでは、遊就館のニューギニア戦の展示が大なる慰めとなったであろうことは容易に想像できる。少なくとも、深く埋められていた恐ろしい記憶がそれがかき回されることはないのだから。同じ理由で、山田は靖国の儀礼に深い慰めを感じたであろう。それは彼が、靖国神社の本殿で参列したと語っていた慰霊祭の儀礼である。ここで我々は、靖国がとる第二の記憶の手法に移ろう。それは儀礼の執行である。

### 儀礼の執行

儀礼を執り行うことこそ、靖国神社とその神職の存在理由である。神職は二種類の儀式を執り行う。戦死者の魂を「英霊」と呼ばれる神にするダイナミックな神格化の儀礼と、慰霊祭として知られる、神職が靖国に宿っている神に食物を供えて祝詞を唱える儀式である<sup>6</sup>。慰霊に対する代償に、神は生者を見守る。このような儀式が毎朝毎晩執り行われ、靖国を第一に儀礼的な場たらしめている。もちろん、儀礼を執り行うのは公共的な記憶の形成においても必須のものである。

奥崎が山田に襲い掛かるに至った口論で注意を引くのは、襲い掛かるその引き金である。二人は死者の魂に慰めをもたらす必要について論じていた。奥崎は、真実と謝罪こそが慰めの前提だと主張した。山田軍曹は、自分は詫びるようなことはないと言い返し、靖国の儀礼に参列して、死んだ戦友達に対する自分なりの慰霊を定期的に行っていたと述べた。「靖国」という言葉が出たまさにその時、奥崎は山田に襲い掛かり、叫びながら蹴り付け、首を絞めようとしたのだった。「靖国行ったら英霊が、その、救われると思うのか、貴様、えっ」。

奥崎は靖国を憎んでおり、「ゆきゆきて神軍」監督の原一男に、神社の春季例大祭に短刀で武装して攻撃を仕掛ける計画を話したこともさえあった。春季例大祭は靖国の年間行事のうち二大行事の一つで、勅使が列席することに特徴付けられる。奥崎が明かした意図は、神職やその他の人々に加え、天皇の勅使を殺害することだった。奥崎が何故靖国をそのように忌み嫌うかは想像できよう。真実とその暴露、責任、そして死者に安息をもたらすことに取り憑かれていた彼は、死んだ戦友や上官の、靖国による神格化と慰霊が免罪の可能性を孕むと知っていた。靖国の儀礼は彼らを全ての責任から免罪し、奥崎が真実だと気付いた事実を否定するのだ。筆者は奥崎がこのように考えたことと想像しているが、本当のところは分からない。ただ、飯田進なる人物がそう考えていたのは知っている。飯田はニューギニアの戦闘に参加し、戦争中の行為により B 級戦犯としてオランダの軍事法廷に召喚された。靖国神社についての近年の NHK スペシャルで、飯田は靖国と戦死者の「英霊」に対する「慰霊」と「顕彰」について冷静に語っていた<sup>7</sup>。彼はカメラに向かって「この言葉自体は大変美しい」、「遺族、戦友会をはじめ国民の心情に訴えるものがある」と認める。しかし「戦争に参加した立場からすれば、本当に殉国の英霊で顕彰される、そういう立場にあったんだろうか、僕は違うと思う」。十万を下らない日本軍将兵がニューギニアで餓死したことを強調し、「兵隊はだれを恨んだか。そういう作戦をした軍の中核におった参謀たちです。それを考えた場合に殉国の英霊という言葉で責任がばかされるということはとても耐えられない」と飯田はしめくくった。

<sup>6</sup> 2つの儀式についての考察は、Breen, 'The living and the dead', pp. 77-81.を参照。

<sup>7</sup> 「戦後 60 年 靖国問題を考える」2005 年 8 月 14 日放送。

戦死者を無差別に英霊として追悼する靖国の儀礼と、靖国による記憶との連関は十分に明らかだと思われるが、詳細に述べておく価値はあろう。靖国の慰霊祭は、戦死者を顕彰することで戦争に行った夥しい数の日本人を思い起こさせる。そのうち 200 万人以上が天皇と日本のための光輝ある戦いのために命を抛った。戦死者は一人残らず、忠誠心、愛国心、犠牲心といった神聖な自己犠牲という価値観を体現した者として思い出される。戦死者のこのような死は、悲しむべき悲劇というよりはむしろ賞賛すべき名誉であり、敗北に終わったあの戦争は、やはり有意義で、名誉のある戦いだったと思い起こされるのである。

この思い起こさせる儀礼において、忘却されるものは何か。

想像を絶する勇氣を持って死んでいった多くの人々に加えて、病死者や餓死者、あるいは人肉のために撃たれて死んでいった者も数多くいた、ということ。

ニューギニアは典型的な事例だろうが、全ての戦争は凄惨で野蛮極まりないものである、ということ。

忠誠心、愛国心、自己犠牲を体現した男女も日本軍国主義の、言うまでもなく無力な犠牲者であり、彼らの戦死は無駄であった、ということ。

### トラウマの抑圧

注意しなければならないのは、遊就館の展示や慰霊儀礼の執行などにおいて、靖国がニューギニア戦を取り扱っている手法は、基本的には靖国に独特なものではなく、ましてや日本に独特というわけでもないということである。耐えられないほど辛い戦争の記憶を抑圧する手法を展開するのは、例外的に目立つ現象というわけではないのだ。これはまさしく、エリック・サントナーの言う「語りのフェティシズム」という種類の手法である。サントナーは次のように述べている。

「語りのフェティシズム」という用語によって私が意味するのは、物語そのものが掘って立つところのトラウマ、喪失の痕跡を消し去ってしまう、意識的あるいは無意識的な語りの形成と展開である。<sup>8</sup>

語りのフェティシズム。それはサントナーにとって「神話作成」と同義語であるが、この語りのフェティシズムは、トラウマ以後の状況において自己のアイデンティティを再構築しなければならないという責務から人々を解き放つ。「彼方へと先延ばしされ、決して到達することはない」。

靖国が展開している高度に複雑な記憶の手法に対して、理論を単純に応用する際の危険については十分留意しているつもりである。それでもサントナーの意見は、説明に有益であるように思われる。

ニューギニアの全ての戦死者を神・英霊とする無差別的な神格化、そして遊就館のニューギニアに関するパネル等における展示の注意深い取捨選択は、語りのフェティシズムの範疇に入るように思われる。200 万人の日本人の死、敗北とその後の占領という恥辱、占領によってもたらされた武装解除、そして占領によって課され、何にも増して日本の戦後の繁栄と平和を保障した憲法。これらトラウマの原因になるものは、神社による過去の回想から見事に消去されている。

### 結語

靖国が記憶の領域で何を行っているか、そして何故そうしているかについて、この小論から引き出される筆者の結論は、靖国は政府の保護を受ける日本の国家的な施設としては不相当であるということである。複雑

---

<sup>8</sup> Santner, 'History beyond the pleasure principle', p. 144.

で個別的なあり方で過去を呼び起こすことに明らかに失敗している点、一貫して全てを包摂するような物語を主張している点、そして不都合な記憶を無視している点などは、言ってみればそれ自体が既に新たな「靖国問題」として、首相による保護という憲法問題、A 級戦犯に指名された人々の神社による合祀といった従来の諸問題に付け加わっている。もちろん、法的には靖国は宗教法人であって、靖国自身がそう主張しているような国家的な施設ではない。従って、靖国が自ら欲する行為を行うのは完全に自由であるが、首相や閣僚の参拝という形をとって国家が保護する場合は、少なくとも、政府が憲法を十分尊重していないかのように映る。東京裁判の判決から距離を置き、靖国の歴史の立場に信憑性を与えているようにすら映ってしまうのである。

代替施設が求められている。それがなければ戦争の終わりは永遠にやって来ないだろう。少なくとも筆者にとって、代替となる記念施設を説得力ある選択肢とする理由が最低でも 3 つある<sup>9</sup>。第一に、当然のことだが博物館やその展示から違う場所に置かれ、またこれも当然だが、神道の神職や儀式の執行もないことで、このような施設は少なくとも、より複雑な戦争の記憶を包含し、靖国を覆っているフェティッシュ化された語りへの対抗ともなる可能性を持つであろう。第二の理由もこのことによる。より複雑な記憶を容易にし、トラウマを抑圧する語りのフェティシズムを防止することはそれ自体、政治的あるいは倫理的な課題が絡まない追悼のための前提条件である。このような新しい施設は、少なくとも日本国首相と英国首相、あるいはひょっとして中国国家主席が肩を並べて、過去に思いを馳せ、共に死者を追悼する可能性をもたらすかもしれない。代替施設に賛成する第三の理由は、負担のないこうした追悼が、戦争と無関係な戦後のアイデンティティを構築する契機になるだろうということである。

安倍晋三首相とその後継者たちは、ニューギニア戦のような見込みのない戦いの中で、望んでにせよそうではないにせよ日本に命を捧げた男女に敬意を払う義務を負っている、というのが筆者の意見である。代替施設は、こうした行為を道徳的に受け容れやすく、外交上も好ましいものにするであろう。

## 参考文献

Breen, John, 'The dead and the living in the land of peace: a sociology of the Yasukuni shrine', *Mortality* 9.1 (2004), 76-93.

Breen, John, 「靖国：歴史記憶の形成と喪失」『世界』756号(2006年9月)

Breen, John, 'Yasukuni and the loss of historical memory' in Breen ed., *Yasukuni, the war dead and the struggle for Japan's past*, London: Hurst, 2007.

Santner, Eric, 'History beyond the pleasure principle: some thoughts on the representation of trauma' in Saul Friedlander ed., *Probing the limits of representation: Nazism and the final solution*, Cambridge University Press, 1992.

Tanaka Hiromi, 'The Pacific war and New Guinea'. @ <http://ajrp.awm.gov.au/ajrp/remember.nsf/pages/NT00002E7E>

Tanaka Yuki, *Hidden horrors: Japanese war crimes in World war 2*, Colorado: Westview, 1996.

---

<sup>9</sup> 代替施設とそれに対する反対の議論については、Breen, 'Yasukuni and the loss of historical memory'を参照。